

# 新約聖書におけるイエスの祈り伝承をめぐって

— 「受難物語」・「ヘブライ人への手紙」を軸として—

土 居 由 美

## 1. はじめに

イエスの祈りについて新約聖書に多く記されてはいない。最もよく知られるものは、どのように祈るべきかイエスによって教えられたものとしてマタイ/ルカに伝えられる「主の祈り」であろう。しかし、イエス自身の祈りの描写としては、少なくともその独自性という観点からすれば「主の祈り」は必ずしも多くを伝えてはいないように思われる。

そこで本稿では、上記の他に受難物語に描かれる「イエスの祈り」及び『ヘブライ人への手紙』に伝えられる死に臨んだイエスの祈り描写を軸とし、その他「主の祈り」及びイエスの十字架上での叫びとして伝えられる内容描写を補助線としてイエスの祈り伝承について改めて迎ってみたい。

## 2. 「受難物語」におけるイエスの祈り

受難物語には死に直面したイエスの差し迫った祈りの姿が描かれる。これらは共観福音書においていずれも「ゲッセマネの祈り」として描写され、読者の心に深い印象を刻む。

この祈りは共観福音書に其々の編集方針に適う形で幾らか形を変えつつ描かれているが、一見するとヨハネには存在しないように見える。しかし、幾人かの研究者によって共観福音書の「ゲッセマネの祈り」に相当するイエスの「祈り」を反映した記述がヨハネにも認められると指摘されてきた<sup>1)</sup>。この指摘を前提とすれば、二資料仮説に基づくかぎり受難物語におけるイエスの祈りのエピソードは伝承の古層に遡り、イエス自身の祈りそのもの或いは少なくとも原始キリスト教徒の祈りを巡る捉え方を反映したものであって、「イエスの祈り」伝承各層について示唆を与えるものとも推測されよう。

そこで、マルコ同様ヨハネも手にした可能性を想定し得る受難物語における「イエスの祈り」伝承古層の存在を想定しながら、先ずは現行の双方の受難物語における祈り描写を比較すると、それは物語上の大枠においては共通の場に配置されているといえるが、相当に異なる文脈と内容に編集されている。即ち、マルコの「ゲッセマネの祈り」は Mk14:32-42 に一括して描かれるが、ヨハネにおいてこれに相当する内容は Jh18:1,11/14:31 及び Jh12:20-36 に分散している<sup>2)</sup>。内容を一瞥したかぎりでは、マルコのイエスの祈りは苦悩を露わにした様相で、ヨハネのそれは達観的相貌を呈して描かれているといえよう。また、マルコの「ゲッセマネの祈り」で描かれる内容は次の三つの要素を含む。(1)イエスが多くの人々と距離を置き弟子たちのみを連れて別の場所に赴く。(2)その場所でイエスは差し迫った自身の死に対峙し懊悩して祈る。(3)イエスは自らの死を神の意志と認識し、意を決して弟子を促し自ら死へと赴く。ヨハネではこれらと同義と考えられる要素がそれぞれマルコより広範な文脈の分散した箇所にも編まれ、それ故これらの要素が描かれた個別の文脈も存在する。

これらを踏まえたとくここでは、現行のマルコとヨハネ受難物語テキストから、以下にマルコとヨハネに類似もしくは共通する部分のみを取り出して対応させて提示し (Aとする)、次いでそのテキストの語彙を基本として受難物語における「イエスの祈り」伝承古層を想定してみることとする (Bとする)<sup>3)</sup>。

A. 「ゲッセマネの祈り」の逸話マルコとヨハネの対応図

<p>Mk14:32 Καὶ ἔρχονται εἰς χωρίον οὐ τὸ ὄνομα Γεθσημανι さて彼らは、ゲッセマネという名の場所 にやってくる。</p> <p>—— 対応なし ——</p> <p>καὶ λέγει τοῖς μαθηταῖς αὐτοῦ. καθίσατε ὧδε ἕως προσεύξωμαι. そして彼はその弟子たちに言う、「私が 祈っている間、ここに座っていなさい」。</p>	<p>Jh18:1 a Ταῦτα εἰπὼν Ἰησοῦς ἐξῆλθεν σὺν τοῖς μαθηταῖς αὐτοῦ πέραν τοῦ χειμάρρου τοῦ Κεδρών これらのことと言ってから、イエスはそ の弟子たちと一緒にケドロン谷の向こ うへ出て行った。</p> <p>ὅπου ἦν κήπος, εἰς ὃν εἰσῆλθεν αὐτὸς καὶ οἱ μαθηταὶ αὐτοῦ. (そこには園があって、彼はその弟子たち と共にそこに入って行った。)</p> <p>—— 対応なし ——</p>
<p>Mk14:33 καὶ παραλαμβάνει τὸν Πέτρον καὶ [τὸν] Ἰάκωβον καὶ [τὸν] Ἰωάννην μετ' αὐτοῦ そこで彼は、ペトロとヤコブとヨハネと を自分と共に連れて行く。</p> <p>καὶ ἤρξατο ἐκθαμβεῖσθαι καὶ ἀδημονεῖν すると彼は、ひどく肝をつぶして悩み始 めた。</p>	<p>—— 対応なし ——</p>
<p>Mk14:34a καὶ λέγει αὐτοῖς. περίλυπός ἐστιν ἡ ψυχὴ μου ἕως θανάτου. そして彼らに言う、「私の魂は死ぬほどに 悲しい。</p> <p>Mk14:34b μείνατε ὧδε καὶ γρηγορεῖτε. ここに留まって、目を覚ましていなさい」。</p>	<p>Jh12:27a Νῦν ἡ ψυχὴ μου τετάραται, καὶ τί εἶπα; 今、私の魂はかき乱されている。何を言 おうか。</p> <p>—— 対応なし ——</p>
<p>Mk14:35a καὶ προελθὼν μικρὸν ἐπιπτεν ἐπὶ τῆς γῆς そして少し先に行き大地にひれ伏し、</p>	<p>—— 対応なし ——</p>
<p>Mk14:35b καὶ προσήχητο ἵνα εἰ δυνατόν ἐστιν παρέλθῃ ἀπ' αὐτοῦ ἡ ὥρα, もしできることならこの時が彼から去っ ていくようにと祈り始めた。</p> <p>—— 対応なし ——</p>	<p>Jh12:27b πάτερ, σῶσόν με ἐκ τῆς ὥρας ταύτης; 『父よ、私をこの時から救い出して下さい』 [と言おう]か。</p> <p>ἀλλὰ διὰ τοῦτο ἦλθον εἰς τὴν ὥραν ταύτην. だが、このために、この時のために私は 来たのだ。</p>

<p>Mk14:36a καὶ ἔλεγεν. ἀββα ὁ πατήρ, πάντα δυνατά σοι. παρένεγκε τὸ ποτήριον τοῦτο ἀπ' ἐμοῦ. ἀλλ' οὐ τί ἐγὼ θέλω ἀλλὰ τί σύ. そして言うのであった、「アバ、お父さん、あなたには何でもおできになります。<u>この杯を私から取り除いて下さい。</u></p>	<p>Jh18:11 εἶπεν οὖν ὁ Ἰησοῦς τῷ Πέτρῳ. βάλε τὴν μάχαιραν εἰς τὴν θήκην. τὸ ποτήριον ὃ δέδωκέν μοι ὁ πατήρ οὐ μὴ πίνω αὐτό; すると、イエスはペトロに言った、「剣を鞘にしまいなさい。父が私に与えて下さっている<u>この杯は、それを飲まずにすませられようか。</u></p>
<p>Mk14:36b ἀλλ' οὐ τί ἐγὼ θέλω ἀλλὰ τί σύ. <u>しかし、私の望むことではなく、あなたの望まれることを。</u></p>	<p>Jh12:24 ἀμὴν ἀμὴν λέγω ὑμῖν, ἐὰν μὴ ὁ κόκκος τοῦ σίτου πεσῶν εἰς τὴν γῆν ἀποθάνῃ, αὐτὸς μόνος μένει. ἐὰν δὲ ἀποθάνῃ, πολὺν καρπὸν φέρει. アーメン、アーメン、あなたがたに言う。麦の種が地に落ちて死なないなら、それは一つのみで残る。だが、もしも死ぬなら、多くの実を結ぶ。</p>
	<p>Jh12:25 ὁ φιλῶν τὴν ψυχὴν αὐτοῦ ἀπολλύει αὐτήν, καὶ ὁ μισῶν τὴν ψυχὴν αὐτοῦ ἐν τῷ κόσμῳ τούτῳ εἰς ζωὴν αἰώνιον φυλάξει αὐτήν. 自分の命に愛着する者は、それを滅ぼし、この世で自分の命を憎む者は、それを永遠の生命にまで護ることとなる。</p>
	<p>Jh12:26 ἐὰν ἐμοὶ τις διακονῇ, ἐμοὶ ἀκολουθεῖτω, καὶ ὅπου εἰμὶ ἐγὼ ἐκεῖ καὶ ὁ διάκονος ὁ ἐμὸς ἔσται. ἐὰν τις ἐμοὶ διακονῇ τιμήσει αὐτὸν ὁ πατήρ. 誰かが私に仕えなければ、私について来なさい。私のいるところ、そこにこそ私の仕える者もいることになる。誰かが私に仕えるなら、父はその人を尊重するであろう。</p>
	<p>Jh12:28 <u>πάτερ, δόξασόν σου τὸ ὄνομα.</u> ἦλθεν οὖν φωνὴ ἐκ τοῦ οὐρανοῦ. καὶ ἐδόξασα καὶ πάλιν δοξάσω. <u>父よ、あなたの名の栄光を現して下さい。</u> すると、天から声が来た、「私は栄光を現した。また現すことになる」。</p>

<p>Mk14:37                  και ἔρχεται καὶ εὕρισκει αὐτοὺς καθεύδοντας,                  καὶ λέγει τῷ Πιέτρῳ. Σίμων, καθεύδεις; οὐκ                  ἴσχυσας μίαν ὥραν γρηγορῆσαι;                  そして[戻って]来る。すると、彼らが眠っ                  ているのを見つける。そこでペトロに言                  う、「シモンよ、眠っているのか。あなた                  はひと時も目を覚ましてはいられないの                  か。」</p>	<p>— 対応なし —</p>
<p>Mk:14:38                  γρηγορεῖτε καὶ προσεύχεσθε, ἵνα μὴ ἔλθῃτε εἰς                  πειρασμόν. τὸ μὲν πνεῦμα πρόθυμον ἢ δὲ σὰρξ                  ἀσθενής.                  [あなたたちは]目を覚ましておれ、そし                  て祈っておれ。試みに陥らないためだ。                  霊ははやっても、肉が弱いのだ。</p>	<p>— 対応なし —</p>
<p>14:39                  καὶ πάλιν ἀπελθὼν προσήγατο τὸν αὐτὸν λόγον                  εἰπῶν.                  そして再び行って、同じ言葉を口にしな                  がら祈った。</p>	<p>— 対応なし —</p>
<p>Mk14:40                  καὶ πάλιν ἐλθὼν εὕρεν αὐτοὺς καθεύδοντας,                  ἦσαν γὰρ αὐτῶν οἱ ὀφθαλμοὶ καταβαρυνόμενοι,                  καὶ οὐκ ᾔδεισαν τί ἀποκριθῶσιν αὐτῷ.                  また再びやって来ると、彼らが眠って                  いるのを見つけた。彼らの眼は重く垂れさ                  がっていたのである。そして彼らは、何                  と彼に答えたらよいか、わからなかった。</p>	<p>— 対応なし —</p>
<p>Mk14:41                  καὶ ἔρχεται τὸ τρίτον καὶ λέγει αὐτοῖς.                  καθεύδετε τὸ λοιπὸν καὶ ἀναπαύεσθε. ἀπέχει.                  そこで彼は、三度目にやって来て、彼ら                  に言う、「なお眠っているのか、また休ん                  でいるのか。」</p> <p>ἦλθεν ἡ ὥρα, ἰδοὺ παραδίδοται ὁ υἱὸς τοῦ                  ἀνθρώπου εἰς τὰς χεῖρας τῶν ἁμαρτωλῶν.                  事は決した。時は来た。見よ、<u>人の子</u>                  は罪びとらの手に渡される。</p>	<p>— 対応なし —</p> <p>Jh12:23                  ὁ δὲ Ἰησοῦς ἀποκρίνεται αὐτοῖς λέγων. ἐλήλυθεν                  ἡ ὥρα ἵνα δοξασθῇ ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου.                  「時が来た。<u>人の子</u>が栄光を受ける[時が]。」</p>

<p>—— 対応なし ——</p>	<p><b>Jh14:30</b>      οὐκέτι πολλὰ λαλήσω μεθ' ὑμῶν, ἔρχεται γὰρ ὁ τοῦ κόσμου ἄρχων. καὶ ἐν ἐμοὶ οὐκ ἔχει οὐδέν, <u>イエスは答えて言った、「この声</u>がしたのは私のためではなく、あなたがたのためである。</p>
<p>—— 対応なし ——</p>	<p><b>Jh14:31a</b>      ἀλλ' ἵνα γινῶ ὁ κόσμος ὅτι ἀγαπῶ τὸν πατέρα, καὶ καθὼς ἐνετείλατό μοι ὁ πατήρ, οὕτως ποιῶ. <u>ἐγείρεσθε, ἄγωμεν ἐντεῦθεν.</u>      だが、私が父を愛し、父が私に命じた、その通りに行おうとしていることを、世が知るように。</p>
<p><b>Mk14:42</b>  <u>ἐγείρεσθε ἄγωμεν.</u> ἰδοὺ ὁ παραδιδούς με <u>ἤγγικεν.</u>  <u>立て、行こう。</u> 見よ、私を引き渡す者が近づいた」。</p>	<p><b>Jh14:31b</b>  <u>ἐγείρεσθε, ἄγωμεν ἐντεῦθεν.</u>  <u>立て。</u> ここから出て行こう。</p>

上記引用中、通常の下線を付した箇所は単語が一致し<sup>4)</sup>、点線による下線を付した箇所は語彙と内容が非常に近く、網掛けにより示した箇所は内容が類似するものである。これらの文面に基づいてこの祈り伝承古層を仮に想定するとすれば以下のようなになるであろうか。

B. マルコとヨハネから想定されるイエスの祈り伝承古層<sup>5)</sup>

Mk14:32Jh18:1 (καὶ) (Ἰησοῦς) (ἐξῆλθεν) (σὺν) (τοῖς) ( <b>μαθηταῖς</b> ) (αὐτοῦ) (εἰς) (χωρίον) (οὗ) (τὸ) (ὄνομα) (Γεθσημανὶ) そしてイエスは彼の弟子達と共にゲッセマネという名の場所に行った。	
Mk14:35b (καὶ) (προσηύχετο) そして祈り始めた。	Jh/
Mk14:34a (καὶ) (εἶπο, n) (αὐτοῖς) そして言った。	(Jh12:27a)
Mk14:34a (περίλυπος) (ἐστίν) <b>ἡ ψυχὴ μου</b> (ἕως) (θανάτου) 私の魂は (死ぬほどに) (悲しい)	Jh12:27a
Mk14:36a αββα ὁ <b>πατήρ</b> , (σῶσόν) (με) (ἐκ) <b>τῆς ὥρας</b> (αύτης) アバ お父さん、私をこの時から救い出して下さい。	Jh12:27a
Mk14:36a (παρένεγκε) <b>τὸ ποτήριον</b> (τοῦτο) (ἀπ') (ἐμοῦ) この杯を私から取り除いて下さい。	Jh18:11
Mk14:36b (ἀλλὰ) (θέλω) (τί) (σύ) しかし、あなたが望まれることを。	Jh12:27b/Jh12:28
Mk14:42 (ἦλθεν) (ἡ) (ώρα), (παραδίδοτα) <b>ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου</b> 時は来た。人の子は渡される。	Jh12:23
Mk14:42 <b>ἔγειρεσθε, ἄγωμεν</b> 立て、行こう。	Jh14:31b

### 3. 『ヘブライ人への手紙』 5 :7-10

ここではさらに『ヘブライ人への手紙』 5:7-10 を以下に引用し、受難物語の「イエスの祈り」伝承を考える一助としたい。

5:7 ὅς ἐν ταῖς ἡμέραις τῆς σαρκὸς αὐτοῦ δεήσεις τε καὶ ἰκετηρίας πρὸς τὸν δυνάμενον σώζειν αὐτὸν ἐκ θανάτου μετὰ κραυγῆς ἰσχυρᾶς καὶ δακρύων προσενέγκας καὶ εἰσακουσθεὶς ἀπὸ τῆς εὐλαβείας,

5:8 καίπερ ὢν υἱός, ἔμαθεν ἄφ' ὧν ἔπαθεν τὴν ὑπακοήν,

5:9 καὶ τελειωθείς ἐγένετο πᾶσιν τοῖς ὑπακούουσιν αὐτῷ αἴτιος σωτηρίας αἰώνιου,

5:10 προσαγορευθεὶς ὑπὸ τοῦ θεοῦ ἀρχιερεὺς κατὰ τὴν τάξιν Μελχισέδεκ.

5:7 彼は肉なる人として生きた日々、自分を死から救うことのできる方に向かって、力ある叫びと涙をもって、願いと嘆願を献げ、畏敬のゆえに聴きいれられたのであつて

5:8 [神の] 子であるにもかかわらず、忍んだ苦しみから従順を学んだのである。

次の部分の主題の提示。

5:9 このようにして彼は完成されたものとなり、[自分] に従うすべての人々のために永遠の救いの源となった。

5:10 神により、メルキツエデクの系統の大祭司と名づけられたからである。

上記下線により示された箇所先に考慮した受難物語古層伝承との内容上の共通要素が認められるといえる。

これらに基づいて以下においては、受難物語におけるイエスの祈りと『ヘブライ人への手紙』 5:7-10 に描かれたイエスの祈りの相貌を軸として、イエスの祈り伝承に関する考察を深めてみたい。

### 4. 受難物語の「イエスの祈り」について

#### (1) イエスの「懊悩」「悲しみ」描写と『詩編』

先の伝承古層の想定から、受難物語のイエスの祈り伝承古層もイエスが非常に悲しみ苦しみながら祈る姿を伝えるものであったと推測される。古層伝承が編集された現行のマルコの文脈では、イエスは自ら祈りに拠って立つというよりも他者による支えを必要としているかのように表現されている (Mk14:33) が、注目すべきはマルコの表現が『ヘブライ人への手紙』 5:7 に言及される「叫び」と「涙」を伴って祈ったという内容に少なくとも部分的に一致している点である<sup>6)</sup>。

ブラウンに拠れば、このような描写に関して、旧約聖書の中に神に嘆願する「苦難の僕」について多くの叙述があり、なかでも『詩編』



22,15,31,10,39,13,43:2,5,55:2-6,116:10-15 等がよく知られていたという背景を前提すれば、Mk14:34 はそれらを映したものと推測される。しかしその一方で、この箇所直前 Mk14:33 でイエスの苦悩の表現がこれら『詩編』から録られたのでないことを示すために二つの動詞「死ぬほどに悲しい (ἐκθαμβεῖσθαι)」「悩ませられる (ἀδημονεῖν)」が用いられていることも注目されるという。そして前者は「究極的な混乱」「恐るべき出来事を前にしての全身的な混乱」を表し<sup>7)</sup>、後者は「身震いするような恐れ」をも表しつつ「他から分たれて苦しむこととなる」という言外の意味を持つと解説される<sup>8)</sup>。また、前者はマルコのといえるが、後者は異なる。さらに「魂」という語は人間全体を表すとされるが、「私」という語は『詩編』に平行が見られるものだと指摘される<sup>9)</sup>。『詩編』との関連性を疑問視する研究者もあるが<sup>10)</sup>、その関連性は Jh12:27 における Ps42:7<sup>11)</sup> の反映によっても確認されると指摘される<sup>12)</sup>。

ブラウンは『II サムエル記』を、マルコの「オリーブ山」のモチーフとヨハネの「キドロンの谷を横切って」というモチーフ双方が由来する原資料とみなすが、この箇所での『詩編』に基づいてマルコが「非常に悲しい」というフレーズを描き、ヨハネが「かき乱されている」という言葉を編んでいるのだとしたら、死に直面したイエスの苦悩描写については、既に福音書前の伝承段階で旧約聖書と関連付けられていたと想定されるべきかもしれない。しかし、ヨハネ 12 章の描写においてイエスは速やかにその苦悩に打ち勝つている故、ヨハネにおける旧約聖書の影響はイエスの勝利にみちた「自己解決」の過程の僅かな片鱗にすぎないものと化している。また、先に想定した伝承古層においてそのような様相は伝えられていないといえる。

他方、Mk14:34 のイエスの言葉の前半部が、例えば、Ps31:10-1 「(10) 主よ、憐れんでください。わたしは苦しんでいます。目も、魂も、はらわたも苦悩のゆえに衰えていきます。(11) 命は嘆きのうちに、年月は呻きのうちに尽きていきます。罪のゆえに力はうせ、骨は衰えていきます。」等のような、「苦難の僕」を描く詩編に由来するのであれば、シェンケ (Schenke)<sup>13)</sup> ら幾人かの研究者によって想定されたイエスの死についてひとつの共通資料が存在していたと想定されるかもしれない。

ブラウンに拠れば、語彙上マルコに近いのは、ヨナが「私は悲しみによって非常に打ちひしがれ、死を望む。」と語る LXX『ヨナ書』4:9 (λελύπημαι ἐγὼ ἕως θανάτου) である<sup>14)</sup>。そしてそこから、フィネガン (Finegan)<sup>15)</sup>、ポーマン

(Boman)<sup>16)</sup> 等は、Mk14:34 を『詩編』42:6 と『ヨナ書』4:9 の組み合わせとみなすのである。

この箇所を「死に臨んで」の最後の感覚を表したものと考える研究者の中ではドーベ (Daube) が<sup>17)</sup>、死によって解放されることを願った疲弊しきった預言者のモデルを引き合いに出す<sup>18)</sup>。しかし、ヴァイス (J.Weiss) は<sup>19)</sup>、イエスは死から救われるように祈っているのだからこの解釈は文脈に合わないとする<sup>20)</sup>。他方ブラウンは、イエスは十字架上で死を恐れる一方で死ぬことを望もうともしているとしてこの矛盾を解消しようとする<sup>21)</sup>。ブラウンが指摘しているように、その他にも多くの研究者により<sup>22)</sup>、次のような聖書の論拠が想定されている<sup>23)</sup>。『士師記』16:16 のデリラが来る日も来る日も問い続けながら彼に迫ったのでサムソンの魂は死にそうになった<sup>24)</sup>、『シラ書』37:2 の「仲間や友人が敵に回ってしまうのは死ぬほどの悲しみではなかろうか」、敵に四方八方を囲まれたという文脈における『シラ書』51:6 の「不義の舌が放つ矢から、救い出してください、私の魂は死に近づき、わたしの命は陰府の近くまで下りました。」等である。

現行のマルコにおいて、祈りの中心部でイエスは記名された三人の弟子から「少し前へ進んで」行き祈った後弟子達のところへ戻って来る<sup>25)</sup>。これは祈り或いは神と交流するための分離という旧約に確認されるモチーフを想起させるものだが<sup>26)</sup>、マルコの描写はそれよりもむしろ弟子達が「時」が近づくにつれて最早イエスと共に歩まないことを表しているようでもある<sup>27)</sup>。しかし、これらの内容は先に想定した受難物語のイエスの祈り伝承古層には存在しない。

## (2) 「時」と「杯」というモチーフ

「時」と「杯」という語は、先に想定した受難物語のイエスの祈り伝承古層にも存在したと考えられるが、これらのモチーフは歴史的及び終末論的意味を持ち、*πειρασμός* という概念に関係し得るものであると指摘されてきた<sup>28)</sup>。

受難物語の先の箇所の中で、イエスはヤコブとヨハネに「杯」を共に飲むことを迫りながら、ここで自らその「杯」を飲むことから解き放たれるように願うという矛盾を描きながら、マルコは死に際して地にうつ伏せになって非常に混乱し、悲しみ、苦悩するイエス像を加えてイエスが体験している危機を表現する。このマルコのイエス描写におけるコントラストは、「最後の食事」での「杯」の言及を想起すれば、その意味合いが一層深められる。Mk14:36 でイエ

スが「この杯 (τὸ ποτήριον τοῦτο) を私から取り除いて下さい」という時、その言葉は Mk14:23-24 を反映し、そこでは葡萄酒 / 血の「杯」によって完全な自己譲渡が象徴されているのに、ここでのイエスは父に「杯」を取り除いてくれるよう嘆願している。

幾人かの注釈者はそのような矛盾する描写は回避して説明されるべきと考えてきたが、他の注釈者はこの描写を神の子でさえも免れ得なかった苦しみを通して従順を学ぶという精神的プロセスを例証するものと捉えてきた<sup>29)</sup>。

次に文脈に注目すれば、共観福音書全てが「杯」に関するイエスの祈りを報告する中で、各々の序文が次のように次第に弱められている点も幾人もの研究者によって注目されてきた。

Mk14:36 「アバ、お父さん、あなたには何でもおできになります」

Mt26:39 「私の父よ、もしできることなら」

Lk22:42 「父よ、もしお望みならば」

この点に関してヨハネは、イエスが望むことと可能なこと及び父に願うべきこととの間の区別を排して伝承を書き換えることによって、どの共観福音書よりも内容を修正しているといえる<sup>30)</sup>。マルコにおけるのと同様にヨハネのイエスの魂はかき乱されているが、救われるようにと祈ることはしない (Jh12:27b)。ブラウンに拠れば、この変更の理由は、ヨハネにとっては「時」が完全なる自己譲渡を行う (Jh12:32) 人の子の高挙の一部あるいは一つと捉えられているからであるとされる。同様に「杯」に関しても、マルコのイエスがそれを「取り除いて下さるように」と祈るのに対して、ヨハネのイエスは (Jh18:11) むしろ、この点についてペトロに叱責を向けるという形で修正されている<sup>31)</sup>。しかし、古層伝承においてはこれらの意味合いは含まれていたと推測されよう。

### (3) 「アバ、父 (αββα ὁ πατήρ)」 「神の御旨が行われますように」

「父」と「神の御旨が行われますように」という描写は、後者に関して全く同一の言葉においてではないものの、内容として古層伝承にも存在すると考えられた。

この点に関して、ブラウンの注釈を参照すると、その要点は以下になる。マルコは「アバ父よ」という表現にアラマイ語筆写とギリシア語を当てるが、アラマイ語の使用という観点からの議論の代表例として、フィッツマイヤー (Fitzmyer) の仮説がよく知られている<sup>32)</sup>。彼によればアラマイ語の αββα

は「父」を表す **ab** の不規則な強調形とされる。また新約聖書に三つある「アバ ( $\alpha\beta\beta\alpha$ )」の用法、Mk14:36、『ガラテヤ人への手紙』4:6、『ローマ人への手紙』8:15 はいずれもギリシア語で「ὁ πατήρ」という呼格的用法の名詞を伴うことから<sup>33)</sup>、呼格的用法の強調形と考えられる。

しかし、多くの議論はエレミアス (J.Jeremias) により提唱された立場を巡るものである。彼は、祈りにおいて「 $\alpha\beta\beta\alpha$ 」とアラマイ語で神を呼ぶというイエスの仕様は特徴的だが、その呼称は親愛なる家族的关系性を意味し、イエスは同時代のユダヤ教において前提とされていた一般的な関係性を超えて「父」としての神との特別で家族的な関係性を唱えたのだと捉えるのである。しかしブラウンが指摘するように、ヘブライ語で「私の父」と神を呼ぶ死海文書の中の祈りの『詩編』著者の例 (4Q372:abi)、LXX において「父」或いは「私の父」と語るユダヤ人の事例も存在する<sup>34)</sup>。

諸福音書においてギリシア語 ( $\alpha\beta\beta\alpha$ ) に字訳された唯一のアラマイ語がマルコのこの箇所 (Mk14:36) のものだが、ブラウンに拠れば、B.C.200-A.D.200 のものと確認されるアラマイ語においては、「abi」という語が「私の父」と呼ぶ際の子供の通常の呼称であったと考えられ<sup>35)</sup>、A.D.200 年代以降の文献においてのみ「abba」が一般的に親にむけて語られる「abi」という語にとって代わったと確認されるのだが、それでもわずか一度オンケロスとヨナタンのタルグムに現れるのみであるという<sup>36)</sup>。

これら全てを考慮し、また「abba」がどのような意味においてであっても神に向けた個人的呼称として用いられていたという紀元前若しくは紀元1世紀のパレスティナのユダヤ教文献における証拠は存在しないとするフィッツマイヤーの説が正しいとすれば<sup>37)</sup>、実際にイエスが「abba」とアラマイ語で神を呼んだのだとすると、この用法は極めて異例なものと判断されるべき証拠があることになる。

イエスが神を「父」と呼んだという史的蓋然性と神学的含意を共に顧慮すれば、神を「父」とするヘブライ語或いはギリシア語大半の聖書用法はイスラエルの民を団結させるという内容と関連しており<sup>38)</sup>、個人による使用例は非常に稀で、イエス前のほんの僅かな時代のみ現れることから<sup>39)</sup> フィッツマイヤーは<sup>40)</sup>、「天の父」という表現が紀元1世紀ユダヤ教において広範に用いられた祈りの形態であったというエレミアスの主張に反論するのである。

新約聖書において神に対して用いられる「父」という言葉<sup>41)</sup>の使用頻度の

多さは、福音書の題材の中にイエスの言葉として「父」を導入するという慣習が増加する傾向にあったことを少なくとも示しているといえようが、このような表現は、福音書記者が独自に思い着いて導入したのではなく、伝承に由来すると推測されるであろう<sup>42)</sup>。

ブラウンに拠れば、ほぼ確かにいえるであろうことは、この呼称はイエスに特徴的なものとしての歴史的記念的「記憶」であり、イエスの自己意識を反映したものでもあったのではないかと想定される。同時に、アラマイ語で神を「父」と呼ぶことそれ自体が「神の唯一の息子である」というイエスの自己認識と一致しているのではないにも拘わらず、後者がキリスト教徒によって大きく発展させられていったことも推測される。この言葉を巡る伝承の継承と発展という文脈の中で、古層伝承にもこの言葉が存在すると想定されてよいのではないか。

幾人かの研究者は、受難物語におけるイエスの祈りを、イエスは息子であるにも拘わらず「強い叫びと涙をもって」「自分を死から救うことのできる方に向かって」祈り「畏敬のゆえに」聴き入れられたのだとする『ヘブライ人への手紙』5:7-8の描写と関連付ける。これに対してブラウンは、『ヘブライ人への手紙』の語彙はゲッセマネのそれとは全く異なっておりまた、死から救われるようにという祈りは、「時」および「杯」から導き出される祈りとは極めて異なると指摘する<sup>43)</sup>。しかし、『ヘブライ人への手紙』の節は、受難物語におけるイエスの祈りの様相との類似性の描写から、少なくとも死を直前にしたイエスの祈りについての伝承が諸福音書を超えて広範に広がっていたのであろうことを確証するものとなっているといえるであろう<sup>44)</sup>。

このような文脈で考えると、マルコによる「 $\alpha\beta\beta\alpha$  ὁ πατήρ」もイエスの真正の言葉という視点を超えて捉えられるべきであり、キリスト教徒の祈りとして用いられるためにギリシア語に翻訳され、最後にギリシア語のみを話す人々のために記されたものであると推測され<sup>45)</sup>、マタイ・ルカがマルコの「 $\alpha\beta\beta\alpha$ 」を削除しているということは、外国語であるセム語が祈りの中で省略されたという更なる伝承及び状況の展開を表すもので、そのことはまた『ガラテア書』と『ロマ書』における同様の定型句によって、マルコがイエスの口にヘレニズムキリスト教徒の祈りの形式を置いたのであろうことをも示すといえるであろう。そして、同様の事柄を示すものが Mk14:35 の「時」に関する祈りにおける「もしできることなら」と平行関係にある Mk14:36 の祈りの第二文節「あなたには何でもお出来になります。」にも現れていると考えられてよいであろう<sup>46)</sup>。

ファン・ウニック (Van Unnik)<sup>47)</sup> は、神の出来ることに関する言及はヘブライ的なものというよりギリシア・ローマ的なものであることを、ホメーロス、ウィルギリウス、アエィウス・アリステデース等に拠って指摘するが、フィロンに「神にはすべてのことが可能である」との記述がみられることから<sup>48)</sup>、Mk14:36 冒頭の祈りはギリシア語を話すキリスト教徒にとって最も馴染みあるものであったと推測されるという<sup>49)</sup>。

しかし、Mk14:36 の祈りの最後には神が何を望むのかという観点も含まれ<sup>50)</sup>、この内容は伝承古層にも含まれると想定されることを考えると、このモチーフを巡る議論は受難物語の祈りと初期キリスト教徒の祈りの比較という視点を深める鍵となると考えられるだろう。

ここで、マルコのみでなく共観福音書における祈りの中での神の意志に関する言説を取り出すと、次のように記されている<sup>51)</sup>。

Mk14:36: しかし [ἀλλα]、私の望むことではなく [ἀλλα]、あなたが (望まれる) ことを

Mt26:39: しかしながら [πλήν]、私の望むようにではなく [ἀλλα]、あなた (望まれる) ように

Mt26:42: あなたの意思が成りますように

Lk22:42a: もしお望みならば

Lk22:42b: しかしながら [πλήν] 私の意思ではなく [ἀλλα]、あなたの [意思] がなりますように

特に上記 Lk22:42b と Mt26:42 の両方に「θέλημά (意思)」と「γενηθήτω (なる、起こる)」という語彙が用いられているが、ソーズ (Soards)<sup>52)</sup> はマルコに反するマタイとルカのこの一致を、共通する口承の祈り伝承から福音書記者への影響であるとみなしている。そうであるなら「主の祈り」もその伝承の一部であると考えられることも可能であり<sup>53)</sup>、マルコの「杯」の嘆願における「ἄββα ὁ πατήρ」は、『ロマ書』及び『ガラテヤ書』の初期キリスト教徒の祈りに由来し、マタイ・ルカの「杯」の祈りに見られる「父」は、「主の祈り」に確かめられる用法に影響を受けたものとも考えられるであろう。下記のようにこれに平行する嘆願がマタイの「主の祈り」の前半に存在するが、そのうちの二つはルカにも現れるからである<sup>54)</sup>。

「あなたの名が聖とされますように」

「あなたの御国がきますように」

「あなたの御心が天に行われる如く地にも行われますように」

「時」と「杯」両用語は受難物語のイエスの祈りにおいては終末論的次元を有するものであると捉えるのが妥当であると考えられたが、これと神の意思を強調した「主の祈り」におけるマタイの三番目の嘆願と「杯」の祈りとの間には近似性もあり、特に Lk22:42b と Mt26:42 の後者が、繰り返しとして同じ動詞を用いるところにそれが認められる<sup>55)</sup>。

ヨハネでは「時」から救われるための祈りについてイエスが論じる節の中でイエスが最後に語るのは、「父よ、あなたの名前が栄光化されますように」(Jh12:28a) という言葉であり、それはマタイとルカの「主の祈り」の最初の嘆願に酷似している。言い換えれば、共観福音書の「父よ、あなたの御心が行われますように」とヨハネの「あなたの名が聖とされますように」という同義語は、共に受難と死に関わるイエスの祈りの中に表れ、「主の祈り」で知られる初期キリスト教徒の祈りのパターンとも共通することが確認されるといえるのである。

共観福音書の「オリーブ山の祈り」とヨハネの「キドロンの谷の祈り」の両方が、『Ⅱサムエル記』15 を反映していること、またマルコの「私の魂は非常に悲しい」とヨハネの「私の魂はかき乱されている」が『詩編』42:6-7 に平行する内容に由来する可能性について先に言及したが、加えてマタイの「主の祈り」における六番目と最後の嘆願も二つの平行箇所をもち、その最初のものがルカにも見出されることも想起されるべきであろう<sup>56)</sup>。また共観福音書全てにおいてイエスが弟子たちに「試み (πειρασμός) に陥らないように祈り続けていなさい」と諭すこの「杯」の祈りと「主の祈り」の最後の嘆願の前半の箇所との緊密性も指摘出来る。

ヨハネについては、17章が死ぬ前夜のイエスによる祈りであることを想起するなら、共観福音書の「杯」の祈りのように「彼らを邪悪な者から守って下さるように〔頼みます〕。」(Jh17:15) は、最後の嘆願の第二の節に非常に近いともいえるであろう。

このような平行関係は偶然でないといみなされるべきだが、同時にこれらは単

純に説明されるべきでないこともわかる<sup>57)</sup>。なぜなら、例えばマタイ・ルカにおける「主の祈り」は、イエスに関連づけられる言葉と形式とから引き出されて既に発展していた初期キリスト教徒の祈りであると想定されるからである。

既に言及したように、『ヘブライ人への手紙』5:7-10も間近に迫った死に際してイエスが苦しみ神に祈ったという初期キリスト教徒による記憶であり理解であったと想定されるが、その祈りは讃歌と詩編の言葉とから形成され、諸福音書へと流れた伝承において祈りの葛藤は、「試み(πειρασμός)」、「時の到来」、「杯を飲むこと」などの鍵言葉によって表現され、これらの流れは伝承古層においても認められるものでもある。

#### (4) 弟子たちに対する最後の言葉

マルコのイエスの祈りの最後には ἤγγικεν 「近づいた」という語が置かれ、この直前の「立て、行こう」という表現は、Jh14:31「だが、私が父を愛し、父が私に命じた、その通りに行おうとしていることを、世が知るように。立て。ここから出て行こう。」と平行する。この言葉が編集されたヨハネの説教では、同じ節の先の箇所「だが父が私に命じた、その通りに行おう」という言葉があり、それは Mk14:36の「しかし私が望むことではなく、あなたが望まれることを」という父への祈りと同様といえる<sup>58)</sup>。また、これに直に先立つ節でヨハネのイエスは、マルコの「私を引き渡す人が近づいてきた」に相当し得る警告「世の支配者が来ようとしている」を発してもいる。またヨハネ 15-17章は編集部として挿入されたものであり<sup>59)</sup>、多くの研究者は Jh14:31 は元来 Jh18:1へと次のように直に繋がっていたと考えている。

「立て、ここから出て行こう。」

「これらのことを言ってから、イエスはその弟子たちと一緒にキドロン谷の向こうへ出て行った。」

そうだとすれば、ヨハネにおいても一連の話は元来はユダの到着へと直接に繋がっていて、正確にマルコにおける繋がりと同じであったということの意味する。即ちこれらは、伝承古層にあった内容の発展形と考えられるということになるであろう。



### (5) 「イエスの祈り」伝承とギリシア・ローマ世界の伝統

マルコの「ゲッセマネの祈り」はキリスト教徒の信仰の中では特別の場を持ち、「弟子達と離れて独りとなるイエス」「杯を取り除いてくれるよう祈る苦悩のイエス」「眠っている弟子達を三度見る孤独のイエス」「裏切り者に面と向かう最後の場面のイエス」などの内容は、「人間の苦しみ」「神による勇気付け」「孤独のうちの自己犠牲」といった要点と共にイエスを信じる者たちがイエスを一層愛するために<sup>60)</sup>、古層伝承から編集されているものであると考えられてきた<sup>61)</sup>。

しかし、福音書が記された当時のギリシア・ローマの所謂異教徒は、ソークラテースの死に伝えられたような死に様に感銘を受け、模範とし、親しんでもいたはずである。自ら毒杯を飲むことによる刑死が無実の高尚な哲学者に迫った時に彼は、完全なる「真」「善」「美」へと向かっていくものとして、泣くことも感情的に抗弁することもなく気高く弟子達を勇気づけながらその運命を甘受した。この世界は陰に過ぎないものと考えられていたからである。ソークラテースの平静は影の世界における存在としての価値づけに基づいたもので、その世界観における死は、むしろ閉じ込められた洞窟から逃れることであった。

これに対して、ユダヤ・キリスト教の文脈では、旧約時代の終盤、死後の世界について肯定的な概念も存在したが<sup>62)</sup>、神がそれに打ち勝つに忠実な者達に力を与えるにしても、そこでは死は依然として敵であった。

これらの価値観の中で死に直面したイエスの苦悩は神の偉大なる贈り物としてのこの世界における苦悩の価値というユダヤの意味を提示するものでもあるが、ユダヤ人の感性の中でも、受難物語におけるイエスの祈りのあり方は問題を生じさせ得たであろう。というのも、マカベアの殉教者たちが、不当な権威の掌中で暴力による死を遂げた人々として描かれ、どのように寛大に善い死を遂げるべきかという「お手本」となるような姿勢で自ら運命に面と向かって行くと伝えられているからである。

ブラウンによれば、これらを総合的に考えていくと、イエスの抵抗と苦悩は、単に苦しみと死に直面することによって引き起こされたのではなく、御国の到来の際に悪と戦うという「試み」に入ったという認識に基づいて理解することなくその他のモデルと比較することは出来ない<sup>63)</sup>。

#### 4. 『ヘブライ人への手紙』5 :7-10 と受難物語「イエスの祈り」古層

ここでは、『ヘブライ人への手紙』5 :7-10 と受難物語「イエスの祈り」伝承の関連性について辿ることとする。

上記に先立つ Heb4:14-16 で「罪を別にすれば、すべてについて〔私たちと〕同じように試みを受けた方である。」とあり、キリスト教徒は彼らの弱さに共感することが出来る大祭司をもっているのだから必要な時に確信を持つべきと記されていることが注目される<sup>64)</sup>。

ギリシア語語彙研究に拠れば、ヘブライ人の手紙の著者は共観福音書のいずれかの語彙によってこの節を記したのでもなければ、いずれかの福音書著者がヘブライ人の手紙の節から「イエスの祈り」描写を創作したのでもないことが確認されるといふ<sup>65)</sup>。伝承古層に関しても同様であろう。

先の引用において下線を施した言葉は、死に直面してのイエスの状況を描写するものだが、このテキストは「苦しみ」をも含めて、福音書全体を通じて描かれたイエスの職務の説明ともなっている。「涙」に関わる動詞は Jh11:35 で、「苦しむ」という動詞 (πάσχειν) は、受難予告 (Mk8:31;9:12) および最後の食事でも用いられたものである<sup>66)</sup>。

では、ヘブライ人への手紙の著者は何処でイエスの死とその懊悩について記された内容を手にしたのだろうか。この点について多くの研究者は『フィリピンへの手紙』2:6-11 の初期キリスト教徒の讃歌、特にその 2:8-9 との平行関係を指摘してきた。『フィリピンへの手紙』の賛歌と『ヘブライ人への手紙』の箇所は、双方とも関係代名詞「誰か (ὅς)」で始められるのだが、ブラウンに拠れば、これは『I コリント人への手紙』1:15 にもみられる讃歌に特徴的な語彙でもある。加えて一層特徴的なのは神学的修正を施された節がこれらの讃歌に付加されている点である。レスコウ (Lescow) はそのような例として、「畏敬の故に聴き入れられたのである」(Heb5:7) という表現を指摘し<sup>67)</sup>、フリードリヒ (Friedrich) はこの節をヘブライ人への手紙のオリジナルとみなし<sup>68)</sup>、「肉なる人として生きた日々」という節を付加とみなしている。

Heb5:7 で同様に際立つのは、並置される名詞「願と嘆願」「叫びと涙」であり、これらが詩的筆致を感じさせることと、四つの単語「祈り」「嘆願」「叫び」「涙」が、同書箇所の中でこのみに現れる点、また、Heb5:8 の「学んだ (ἐμαθεν) と「苦しみ (ἐπαθεν)」という単語には語呂合わせが認められるところである<sup>69)</sup>。最後

の点については、初期ユダヤ・キリスト教徒の賛歌は『マカベア記』や『クムラン文書』に知られるユダヤの賛歌のようにしばしば旧約のモチーフの語呂合わせから成る故<sup>70)</sup>、これはまさにヘブライ語の文節であるともいえる。

ポーマン (Boman) は<sup>71)</sup>、旧約において深い苦悩から発せられる祈りは、『出エジプト記』2:23、『民数記』12:13、『ユディト記』3:9などにみられるように、しばしば、神への叫びの言葉のうちに語られ、また『ユディト記』20:26、『IIサムエル記』12:22、『ヨエル記』2:12,17のように、神の前で涙が零れ落ちるという内容となっていると指摘する。また、多くの研究者はヘブライ人への手紙の他の箇所にも多く認められるという理由で同5:7にも『詩編』のモチーフを探し、ディベリウス (Dibelius) は Ps31:23 のギリシア語の影響を指摘する<sup>72)</sup>。Ps39:13 では、「主よ、わたしの祈りを聞き、助けを求める叫びに耳を傾けてください。わたしの涙に沈黙していませんでください。わたしは御もとに身を寄せる者、先祖と同じ宿り人。」とあるからである。アンダーソン (P.Anderso) は Heb5:7 の多くの単語は Ps22:24 に現れるといい、幾人かの研究者は Ps116 の最初の節<sup>73)</sup>「わたしは主を愛する。主は嘆きを祈る声を聞きわたしに耳を傾けてくださる。生涯、わたしは主を呼ぼう。」を指摘するが、シュトロベール (Strobel) は、Heb5:7 の大半の語彙は『詩編』全体に散見され、その典型的語彙は「その日に (116:2)」「祈り (116:1)」「涙 (116:8)」「救い (116:6)」「死から (116:8)」「聞こえた (116:1)」等であるとするが、これらの幾つかは先に言及した研究者たちが讃歌に後に付加されたものと判断するものでもある。これらの指摘を妥当とすれば、ヘブライ人への手紙に付加を施した人物がこの讃歌を『詩編』に似せたのだと考えられもしよう。Ps116 の終わりにおいては<sup>74)</sup>、祈りと涙が聞かされ、また死の畏から救われたことに対して神に感謝を捧げ、またエルサレムの主の家の庭で感謝の捧げものを捧げることが誓われる。これらに拠れば、死から救われるようにというヘブライ人への手紙のイエスの祈り描写は、初期キリスト教徒による讃歌に由来するものであり『詩編』のモチーフのモザイクであるという考察は納得いくものと判断されるであろう<sup>75)</sup>。

他方、『ヘブライ人への手紙』5:7-10の「肉なる人として生きた日々」という時間枠は、死と苦しみに関わる祈りの緊迫性によって条件づけられている。ブラウンによれば、著者はイエスの人間性の深みに由来し実際に語られた叫びと苦勞そのものである苦悩に満ちた祈りを描写しながらイエスの神性に極めて高い価値を置き<sup>76)</sup>、イエスが「子」であることと肉のうちに死に直面し苦悩に満

ちて切羽詰り、その死から救ってもらえるよう祈ることとの間に鋭いコントラストを描いているといえる。

「イエスの祈りは聞かれた」それゆえ彼は死から「救われた」と『ヘブライ人への手紙』がイエスの自己犠牲を強調しているということは、「さて、子供たちは血と肉とに与っていたから、彼も同様にそれらを共有した。死の力を持つ者、つまり悪魔を死を通して滅ぼすためであり」(Heb2:14) とあるように、イエスが死に征服されることから助けられたということを表し、またイエスが「完全にされること」というのは、死の後に彼が天の幕屋に入った (Heb9:11-12)<sup>77)</sup> そして、神の右手に坐する (1:13)<sup>78)</sup> ことを意味しており、Heb2:9 にも多くの同様の内容が描かれている<sup>79)</sup>。

『ヘブライ人への手紙』において「死から救われるように」というイエスの祈りが記される一方で、ヨハネのイエスは「父よ、私をこの時から救い出してください」と語るべきかどうか論じる。これに対してマルコの「杯」或いは「時」に関する祈りでは「救う / 救われる」という言葉は用いられない。

『ヘブライ人への手紙』では、祈りは「力ある方 (*δυναμέως*)」に向けられるが、ここで用いられる動詞の形容詞形 *δυνατός* は、マタイの最初の祈りにも用いられる。『ヘブライ人への手紙』において「イエスの祈り」は「聴き入れられた」と記されるのに対して、Jh12:28 ではイエスの死を含む栄光化の対話の中で神の声による答えとして、神は「栄光を現し」また「現す」と答えたとして描かれる。さらに、『ヘブライ人への手紙』では、「聴き入れられた」という文脈を描くために「畏敬のゆえに」というフレーズが用いられ、イエスが苦悩の恐れから解放されたことを意味するものとも解され得るが、受難物語のイエスの祈りにおいては、マルコから伝承古層に至るまで、イエスは激しく懊悩し祈りの中で自ら解決を見出して再度現れる。

『ヘブライ人への手紙』では、イエスは苦しみから従順を学んだとも記されるが、受難物語のイエスの祈りにおいてイエスは「あなた (神) の望まれることを」と祈る。また、『ヘブライ人への手紙』において、イエスは完成されたと記されるが、Jh12:28 では、父が「栄光を現し」また「現す」と記されて<sup>80)</sup>、それはまた、引き渡されるイエスが、世が存在する以前から持っていた栄光を与えられることと関連づけられる<sup>81)</sup>。

さらに、Heb4:15 の導入の文脈において、イエスは誘惑された / 試された (*πεπειρασμένον*) と記されるのに対して<sup>82)</sup>、マルコは同じ単語を弟子たちが誘

惑に陥らないように (ἵνα μὴ ἔλθῃτε εἰς πειρασμόν) という文脈の中で用いる。

ここまで主として、『ヘブライ人への手紙』とマルコ及びヨハネまたは受難物語のイエスの祈り伝承の共通項について触れたが、相違内容としては、前者が神への「力ある叫び」について語るのに対して、後者において同様の表現はみられないこと、前者においては、イエスが死から栄光に満ちて現れるという意味においてイエスの祈りは聴き入れられるが、後者における「時」或いは「杯」の祈りへの答えは、イエスが死に直面しなければならないということを確認するものとなっているという点が挙げられるだろう。

## 5. 『ヘブライ人への手紙』と「十字架上の言葉」

補助線として最後に、マルコにおける「イエスの十字架上の叫び」と『ヘブライ人への手紙』とに認められる共通する内容についても一考してみたい。

上述の『ヘブライ人への手紙』において、イエスの「力ある叫び (μετὰ κραυγῆς ἰσχυρᾶς)」について言及されるが、マルコにおいては十字架上のイエスが神に対して「大声で (φωνὴν μεγάλην)」叫んだ (ἐβόησεν)」という描写がある。この記述に関して『ヘブライ人への手紙』のイエスの叫びは、『詩編』116の内容が反映されていると考えられ、マルコのイエスの言葉は『詩編』22:2からのものであると考えられてきた。また、『ヘブライ人への手紙』のイエスの叫びは<sup>83)</sup> マルコにおける十字架上のイエスの叫びに相当し<sup>84)</sup>、そこでイエスは神によって見捨てられたという感覚をも表現している。

『ヘブライ人への手紙』において、イエスは「このようにして彼は完成されたものとなり、[自分] に従うすべての人々のために永遠の救いの源となった。」とされるが、マルコにおいては神殿の聖所の幕が裂けることによって死後に百人隊長がそれを告白する<sup>85)</sup>。またヨハネにおいては十字架の身体から血と水が流れるというあり方で生命が与えられた徴が描かれる。

マルコ及びヨハネはイエスが死から起こされたと描くが、それは恐らく『ヘブライ人への手紙』が、死から救われるようにというイエスの祈りが聴き入れられ、「イエスが、死の苦しみの故に栄光と栄誉の冠を被せられている」と記すことにより表しているものに相当すると考えられる<sup>86)</sup>。

語彙に関しては、十字架上でのイエスの最後の瞬間を、イエスが父が万事を成し遂げたと描くために Jh19:28,30 では完了形が用いられ、τετέλεσται と τελειωθή とが併用されるのに対して、Heb9:12<sup>87)</sup>、10:12<sup>88)</sup> において「完成される」

とは十字架上の死から天の聖所へ自らの血を運びながら移動することであると解されるのだが、ヨハネは十字架をイエスがこの世から父のもとへ赴く過程(12:32; 13:1; 17:11)であり<sup>89)</sup> 人の子の高挙のステージとして描くのである<sup>90)</sup>。

全体として、Heb5:7-10の祈りは十字架上のイエスの祈りよりも受難物語におけるイエスの祈りに類似しているが、その祈りのみに関連づけることは十分ではない<sup>91)</sup>。その関連性は複雑であり、『ヘブライ人への手紙』の諸福音書への或いは諸福音書の『ヘブライ人への手紙』への直接の関連性は存在しないが、受難物語におけるイエスの祈り伝承古層からその発展形各層に接続する複雑な経路が存在したことが確認されるといえるのみである。

## 5. 結論

受難物語におけるイエスの祈り伝承古層を現行のマルコ及びヨハネのテキストに基づいて想定し、『ヘブライ人への手紙』5:7-10と現行の受難物語におけるイエスの祈りのテキストと共に軸として新約聖書におけるイエスの祈り伝承について辿ると、以上概観してきた内容から次のようなことが言える。

イエスが差し迫った死に直面して苦しみながら神に祈ったということは、相互に資料上の依存関係がない受難物語におけるイエスの祈り伝承古層と『ヘブライ人への手紙』5:7-10のテキスト双方において共通する基本内容となっていることが確認される。

このイエスの祈りは初期キリスト教徒の記憶或いは認識であったと考えられ、この記憶と認識とは、諸福音書受難物語及び『ヘブライ人への手紙』5:7-10において、「時」「杯」「父」苦しみと嘆きの『詩編』等様々な異なる題材によって異なる様相に物語化されて表現されているが、その伝承の基礎を辿ってゆくと、いずれもイエスが死に際して苦悩のうちに祈りながら神の意思へと自らを委ねて行ったというその歴史の核へと行き着き、そこから現行の福音書に編まれたイエスの様々な祈りの場面へと伝承が発展していったという在りようを改めて確認することが出来るといえる。

## 注

- 1) それにも拘わらず同エピソードの編集史・伝承史研究の際立つ成果は数少ない。
- 2) マルコとヨハネにおける同エピソード該当箇所については、Bibleworks 9 の並行箇所表示機能及び R.E.Brown, *The Death of the messiah*、特に Doubleday, New York 1994, 108-234 参照。
- 3) 本論全体を通して聖書テキストの引用は以下に拠る。日本語訳は新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』、岩波書店 2011 第 8 刷より引用。ギリシア語は、Bibleworks Version 9 の NT27。なお文中の太字・下線等の印は筆者による。
- 4) 但し語形変化は異なる場合も含む。
- 5) 上記文章は意味及び内容に鑑みてマルコ或いはヨハネいずれかのテキストに用いられる語彙から補足して文章を再構成した。
- 6) R.E.Brown 前掲書 153 参照。
- 7) LXX 『シラ書』 30:9 からのもの。R.E.Brown、同上参照。
- 8) LXX にはないが『詩編』(61:3) シマンホス版に存在する。R.E.Brown、同上参照。
- 9) Ps42:6、42:12、Ps42:7 では「私の魂はうなだれて (τράσσειν)」という表現が重ねられる。
- 10) 例えば、Kelber, *Mark 14* 178 参照。また、R.E.Brown、前掲書、154 参照。
- 11) 「わたしの神よ。わたしの魂はうなだれて、あなたを思い起こす。ヨルダンの地から、ヘルモンとミザルの山から。」
- 12) この場面に関して、ヨハネには数回の平行が確認される（「今、私の魂はかき乱されている (τράσσειν)。」)
- 13) Studien 546 参照。また、R.E.Brown、同上参照。
- 14) LXX 『ヨナ書』 4:8 参照。
- 15) Finegan, *Überlieferung* 70 参照。また、R.E.Brown、同上参照。
- 16) Boman, *Gebetskampf* 271 参照。また、R.E.Brown、同上参照。
- 17) Daube, *Death* 196-98 参照。また、R.E.Brown、同上参照。
- 18) 具体的にはモーセ（『民数記』 11:15）、エリヤ（『列王記上』 19:4）、エレミア（『エレミア』 20:14-18）等。Bultmann、Gnilka、Hering、Klostermann、Lohmeyer、Schenke、Schweizer 等が概ねこの説を採る。また、R.E.Brown、同上参照。
- 19) J.Weiss, *Schriften* 1.194 参照。また、R.E.Brown、同上参照。
- 20) 同様の理由から、Pesch, *Markus* 2.389 も、ヘリング (Héring) 及びドーベによる先のような仮説を退ける。また、R.E.Brown、同上参照。

(86) 新約聖書におけるイエスの祈り伝承をめぐって (土居)

- 21) ブラウンはヘリングの説は説得力ないものとみなす。
- 22) Lagrange、Loisy、Swete、Taylor 等。R.E.Brown、前掲書 155 参照。
- 23) R.E.Brown、同上参照。
- 24) 「来る日も来る日も彼女がこう言ってしつこく迫ったので、サムソンはそれに耐えきれず死にそうになり」(『士師記』16:16)。
- 25) 通常は「こちらに来て、近づいて来て」を意味する *προσηύχeto*、および形容詞的用法においては空間よりもむしろ時間的なものを表す *μικρόν*、これら双方の単語は新約聖書において通常とは異なる用い方をされているといえる。ルカは同じ行動に関して異なる語彙で報告しているが、その語彙は通常ルカに特徴的なものである。
- 26) 『創世記』22:5、『出エジプト記』19:17、24:2,14、『レビ記』16:17 など。
- 27) 「御顔の前に」(『創世記』17:3、『ルカ』17:16 参照) に代えてアオリスト形の動詞を用いることによって、Mt26:39 は、僅かにマルコのイエスの悲しみの局面を和らげている。ルカもまたマルコのイエスを「ひざまずかせる」ことによって語調を和らげている。これは『使徒言行録』におけるキリスト教徒の祈りの際に、より一般的なものでもある(『使徒言行録』7:60、9:40、20:36、21:5)。ルカは将来の信仰者のための祈りのモデルとしてのイエスに関心があるように思われる。R.E.Brown、前掲書同上参照。
- 28) R.E.Brown、同上参照。
- 29) Heb5:8 参照。
- 30) R.E.Brown、前掲書 171 参照。
- 31) R.E.Brown 同上参照。
- 32) Abba 参照。また、R.E.Brown、前掲書 172 も参照。
- 33) R.E.Brown 同上参照。
- 34) 『IIIマカベア書』6:3、『知恵の書』14:3、『シラ書』23:1 参照。R.E.Brown、同上も参照。
- 35) J.Barr、'Abba Isn't Daddy,JTS NS 39 (1988) 28-47 参照。R.E.Brown 同上も参照。
- 36) 但し Mal 2:10 は記述であって呼称ではない。以上、Fitzmyer、Abba 29-30 参照。R.E.Brown 172-143 参照。
- 37) Fitzmyer、Abba 28 参照。R.E.Brown、同上も参照。
- 38) 『申命記』32:6、『イザヤ書』63:16 参照。
- 39) 『シラ書』23:1,2 ギリシア、『シラ書』51:10 ヘブライ語、『1QH』9:35 等。
- 40) Fitzmyer、Abba 27 参照。R.E.Brown 前掲書 173 も参照。
- 41) 福音書のみで 170 回「父」として神を語るイエスが、Mk に 3 回、Q に 4 回、ル



- カ特殊資料に4回、マタイ特殊資料に31回、ヨハネに凡そ100回。R.E.Brown 同上参照。
- 42) 『ガラテア書』4:6、『ロマ書』8:15において字訳されたアラマイ語とギリシア語の組み合わせによる「 $\alpha\beta\beta\alpha\ \delta\ \pi\alpha\tau\acute{\eta}\rho$ 」はギリシア人改宗者が崇敬される表現としてアラマイ語を学んだということを表すものであろう。R.E.Brown、同上参照。
- 43) R.E.Brown、前掲書 133-134 参照。
- 44) Giblet, Priere 265-66 はイエスの言葉を一般的な祈りのパターンと見なしている。R.E.Brown、同上も参照。
- 45) 類似する祈りを次のようなパターンに見ることが出来る。「然り、アーメン ( $\alpha\acute{\iota}, \acute{\alpha}\mu\eta\eta\eta$ ) (『黙示録』1:7)」「マラナタ ( $\mu\alpha\rho\acute{\alpha}\nu\alpha\ \theta\acute{\alpha}$ ) (『I コリ』16:22)」「然り、私はすぐに来る ( $\acute{\epsilon}\rho\chi\omicron\upsilon\ \kappa\acute{\upsilon}\rho\iota\epsilon$ ) (『黙示録』22:20)」などである。
- 46) R.E.Brown、同上も参照。
- 47) Van Unnik, Alles 参照。R.E.Brown、前掲書 173-175 参照。
- 48) De opificio mundi 14;46 参照。R.E.Brown、前掲書 173-175 参照。
- 49) van Unnik, Alles 36 参照。R.E.Brown、前掲書 173-175 参照。
- 50) Mk14:36の最後の言葉は、イエスの“私は”ではなく、神に関する“あなた”である。
- 51) R.E.Brown、前掲書 176 参照。
- 52) Soards, Passion 71-72 参照。R.E.Brown、同上も参照。
- 53) これに関しては膨大な文献が存在し、大半の研究者がルカの「主の祈り」に現れる「父」が、マタイの「天における父」よりもよりオリジナルであるとみなしている。R.E.Brown、同上も参照。
- 54) R.E.Brown、前掲書 176 参照。
- 55) R.E.Brown、同上参照。
- 56) 「私を試み ( $\pi\epsilon\iota\rho\alpha\sigma\mu\acute{o}\varsigma$ ) に会わせない下さい。  
しかし、悪から救い出して下さい。」
- 57) 例えば、「マルコは前マルコ資料の中に「主の祈り」を手にしてしたが、それをひとまとまりに報告する代わりに、ばらばらにして、その一部をここで用いた」という仮説、或いは、マタイは「ゲッセマネにおけるイエスの真正の言葉から取り出した「あなたの御心が行われますように」という言葉を嘆願の祈りに付加することにより、主の祈りの形を肉付けしたという仮説、更に「歴史的に主の祈りは、ゲッセマネにおいて作られた (Kruse, Pater)」という仮説によって簡単に説明すべきではないとブラウンは指摘する。R.E.Brown、前掲書 177 参照。

(88) 新約聖書におけるイエスの祈り伝承をめぐる (土居)

- 58) このテーマは Lk22:42、また Mt26:42 の二番目のイエスの祈りで「あなたの意思が成りますように」となる。
- 59) BGJ1.xxxvii;2.656-57 参照。R.E.Brown、前掲書 177-178 も参照。
- 60) R.E.Brown 前掲書 178-179 参照。
- 61) R.E.Brown 同上参照。
- 62) 『イザヤ書』、『ダニエル書』、『II マカベヤ書』、『黙示録』など。
- 63) R.E.Brown 前掲書 178-179 参照。
- 64) 著者は Heb5:5 で、大祭司であるキリストは自己聖化ではなく神によって任命されたのだと主張している。R.E.Brown 前掲書 227 参照。
- 65) R.E.Brown、同上参照。
- 66) Lk22:15 参照。
- 67) Lescow, Jesus...Hebräerbrief 223,229 参照。R.E.Brown、前掲書 228 も参照。この付加はイエスの祈りが答えられなかったのだと読者が考えることを防ぐ内容となっている。
- 68) Friedrich, Lied 107-10 参照。R.E.Brown、同上参照。
- 69) J.Coste, Pech, SR 43[1955],481-523, 特に 517-22 参照。R.E.Brown、前掲書228も参照。
- 70) BBM346-66 on Lucan infancy; R.E.Brown、前掲書 228 も参照。
- 71) Boman, Gebetskampf 266 参照。R.E.Brown、前掲書 228 も参照。
- 72) Dibelius, Gethemane 参照。R.E.Brown 前掲書 228 も参照。
- Ps.31:23 「恐怖に襲われて、わたしは言いました。「御目の前から断たれた」と。それでもなお、あなたに向かうわたしの叫びを嘆き祈るわたしの声をあなたは聞いてくださいました。」 Ps39:13 では、「主よ、わたしの祈りを聞き、助けを求める叫びに耳を傾けてください。わたしの涙に沈黙していないでください。わたしは御もとに身を寄せる者 先祖と同じ宿り人。」とある。
- 73) ギリシア語『詩編』では 114-15。
- 74) 17-19 節。
- 75) 同様にこの節が賛歌に由来するものであると考える研究者として、Brandenburger、Braunmann (洗礼の賛歌)、Friedrich、Lescow、Schille、Strobel 等があげられる。R.E.Brown 前掲書 228-229 参照。
- 76) イエスは、預言者、モーセ、諸天使たちよりも偉大であり、“神”と呼ばれ得る [1:8]。
- 77) Heb 「9:11 キリストは、もたらされた善きものの大祭司として来た時、より大いなる、より完全な、手で造られたのではない、つまりこ〔の世界〕の被造物で

きたのではない幕屋を通り、9:12 山羊や子牛の血を介してではなく、自分の血を介して一度で聖所に入った。永遠の贖いをかちえたのである。」

78) Heb「1:13 いったい御使いたちの誰に向かって〔神は〕言っているであろうか、「私の右に座っていなさい、私があなたの敵をあなたの足台とするまで」

79) 「私たちが目にするのは、神の恵みによりすべての人のために死を味わうよう、「ほんの少しの間、御使いたちに劣るようなものとされた」イエスが、死の苦しみのゆえに、栄光と栄誉の冠を被せられていることである。」 R.E.Brown 同上参照。

80) Jh12:28 「父よ、あなたの名の栄光を現して下さい」。すると、天から声が来た、「私は栄光を現わした。また現すことになる」。

81) Jh17:4-5 「私は、行うようにとあなたが私に与えて下さっている業を成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。父よ、今あなたご自身が私の栄光を現わして下さい。世が存在する以前に、あなたのもとで私が持っていたあの栄光で。」

82) Heb4:15 「私たちには大祭司があるが、この方は私たちの弱さを共に苦しむことのできない方ではなく、罪を別にすれば、すべてについて〔私たちと〕同じように試みを受けた方である。」

83) 「自分を死から救うことのできる方に向かって、力ある叫びと涙をもって、願いと嘆願を献げ」

84) Mk15:34 参照。

85) 共観福音書全てにおいて。

86) Heb2:9 参照。「私たちが目にするのは、神の恵みによりすべての人のために死を味わうよう、「ほんの少しの間、御使いたちに劣るようなものとされた」イエスが、死の苦しみのゆえに、栄光と栄誉の冠を被せられていることである。」

87) Heb9:12 「山羊や小牛の血を介してではなく、自分の血を介して一度で聖所に入った。永遠の贖いをかちえたのである。」

88) Heb10:12 参照。

89) Jh12:32 「そして、私は地から挙げられるなら、〔その時には〕すべての人をこの私の方へ引き寄せることになる」

Jh13:1 「過越の祭りの前に、イエスはこの世から父のもとに移るべき、自分の時の来たことがわかっていたので、世にいる自分に属する人々を愛するにあたって、〔この人々〕を極みまで愛した。

Jh17:11 「そして、私はもう世にいなくなり、彼らは世にいます。そしてこの私はあなたのもとに赴こうとしています。聖なる父よ、私たちが〔そうである〕ように、

(90) 新約聖書におけるイエスの祈り伝承をめぐって (土居)

彼ら〔も〕一つであるよう、私に与えて下さっているあなたの名のうちに、彼らを守ってください。』

90) R.E.Brown, 前掲書 232 参照。

91) R.E.Brown, 前掲書 233 参照。フォイエ (Feuillet)、オマーク (Omark) ら。ブラウンに拠れば、そのような捉え方は、ゲッセマネに関するマルコの描写は、救われるようにイエスが祈ったということが何らかのかたちで反映されたもので、より史実に近い内容を留めているという仮説をしばしば映し出したものであるとして、批判の対象とされている。